



高校生活をバネにして

16期生
吉井 真一

今年16期生は卒業して2年、母校と同じ20歳を迎えました。振り返ると、今の自分は高校生活をなくしては語れないという人も多いのではないのでしょうか？当時まだまだ子供だった私達、周りに迷惑をかけ、自分勝手な行動を取り、もう自分は大人だとつぼっていた頃が今ではなつかしく思います。苦々しい思い出もありますが、そんな私達が、今ではもう立派な社会人。時の立つのは早いものです。子供から大人へなっていく自分を実感できる年になりました。いい経験も失敗談もある高校生活。今では自分を形成する一部分です。

居眠りしてしまった授業、必至で走った持久走、徹夜でいどんだ試験。そして全員で楽しんだ各行事。今では全てよい思い出となりました。

16期生一人ひとりが高校での思い出を支えとし、またバネにして、人生において最も大切な時期を乗り越えようとしています。自分が正しいと思うこと、夢をしっかり抱いて…。これからの人生、高校生活を忘れることはないでしょう。今の自分は高校生活あつてのものなのですから…。



野球部マネージャー

16期生
植村 敦子

20周年、本当におめでとうございます。私の高校生活は、野球部のマネージャーをしていた事が一番の思い出です。3年間で休みも数えるほどしかなくて、夏の練習の時は帰りも遅くてしんどいなって思った事もあったけどそんな気持ちはその時だけで、やっぱりクラブに行くのは楽しかったです。楽しいって言っても遊びじゃないから仕事も思ってた以上に大変でした。でも今は、また出来るんだったら是非やりたいぐらいです。部員の練習や試合している姿を見るのもすごく好きだったし、自分も一緒にプレイしている気分で喜んだり泣いたりしていました。マネージャーっていいよなっていう憧れで入って、実際そんな簡単な仕事ばかりじゃなくて始めは不安でしょうがなかったけど、本当に野球部のマネージャーが出来て良かったです。私が、がんばってこれたのも周りの支えがあったからこそだと思います。色々お世話になった先生方、先輩方、後輩、そして一番近くで助けてくれた同級5人に感謝しています。ありがとうございました。これからも野球部での思い出を大切にしていきます。そして、柏東野球部を応援し続けてます。

17期

1993~1996



Memories



素晴らしい先生方、 生徒達に出会えた17期生

17期学年主任
中瀬 弘

柏原東高校創立20周年おめでとうございます。

1988年から始まった「40人学級をすすめる」運動の中で、初めて実現された1クラス40人学級が本校では17期生でした。かつて1クラス48人という学級定員は80㎡の教室に生徒達が舐め込んでいる状況でしたが、随分と改善され、ゆきとどいた教育へ一歩踏み出す条件が生まれました。

生徒達をしっかりと育てたい、厳しく優しく育てたい、そんな想いで私たちも取り組みました。この時の担任団は転任間もない白木原先生、得田先生、村上先生、牧野先生、外村先生、小野先生、高岡先生、谷口先生でした。

この17期生は3つの取り組みを3年間重視してきました。授業・クラス活動・生徒指導を総合的に取り組むことでした。

生徒たちもこの方向を理解してくれ、私たち教師集団によくついてきてくれました。その結果、教師と生徒との信頼関係は高まり「荒れた学校」のイメージから少しは「落ち着いた学校」へと変わっていきました。

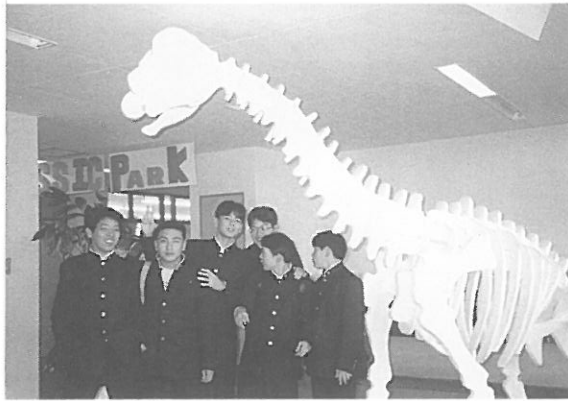
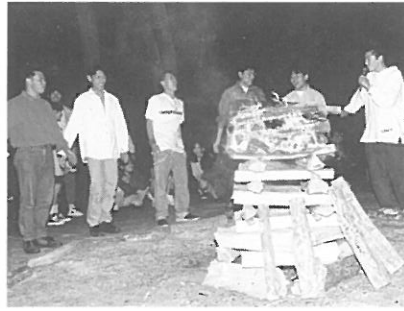
バブル崩壊の不況による就職難を何とか乗り切り、また、進学においても国立大学の合格など十数年ぶりの結

果を生み出しました。

柏原東高校の良き伝統であった教師集団が一致団結して教育にあたること、生徒達へは厳しさと優しさを上手に統一させる教育、これらが17期生を育てていった力だと思っております。

私も素晴らしい先生方、生徒達に出会え学年主任として身にあまる光栄を感じさせて頂きました。幸いなことに、後輩の学年も17期生の取り組みを評価して頂き一層の発展を目指して頂いています。

柏原市の唯一の府立高校として、柏原東高校が今後ますます地域からの信頼を高め発展することを切に願っています。



先生方は一生懸命

17期生
春名 真紀

柏原東高校で3年間学んだことは私自身がこれから長い人生を歩んでいく大きな財産です。まだ卒業して何ヶ月しかたっていないせいか、毎日ワイワイ騒いでいた高校生活が恋しいです。体育祭や文化祭に向けてのクラスの取り組みは他のクラスに負けたくないというライバル意識もあり遅くまでのこつてがんばりました。時には意見のくい違いでケンカもしましたが作品が出来上がった時の感動、クラスの団結は忘れることができません。行事を通じて結果よりそれまでのがんばりが大切だということを教えられました。高校の友達は一生涯の友達と言いますが、みんなそれぞれ違う道に進みなかなか会うことが出来ませんが電話で励まし合ったり、社会の厳しさを語り合ったりしています。友達の一言が自分にとって何よりも励みになることもあります。私も含めて「あの子が嫌い」とかよく言う人がいますが、相手を変えようとするのではなく自分自身を変えて相手の気持ちを聞いていける人になりたいものです。そしたら今以上に友達も増えもっと楽しい学校生活を送っていたのではないかと思います。卒業して社会に出て不安な事があっても相談できる友達がないのはとてもさみしいことです、私が柏原東に入学して本当に良かったと思うことは、先生方が私達と一緒に何事にも一生懸命取り組んで下さったことと、体育祭で17期生が団結できてやれば出来るということを教えてもらったことです。柏原東の卒業生としてこれからも人の先頭に立っていける人間になれるようにがんばります。



私を育て変えてくれた

17期生
山口 俊明

柏原東高校が創立20周年を迎え、たいへん嬉しく思います。

ついこの間送り出してもらったばかりで、なかなか実感が湧きませんが、本当に充実していた3年間だったなと改めて思います。中でも最高の思い出として残っているのは、私自身を大きく変えてくれた生徒会を務めたことです。執行部の仲間と共に一つ一つの行事を計画し、やり終えた時の満足感は忘れることができない経験です。

また勉強の面では、大学進学というかつてからの目標に対し、先生方の熱心な補習、さらには二度にわたる勉強合宿も開いてもらい大変感謝しています。現在私が大学で学べるのも先生方の温かい行為によるものだと思います。

私を大きく成長させてくれた柏原東高校が自然に恵まれた環境を生かし、ますます発展し伝統ある学校になることを心より願っています。

18期 在校生は今



Memories



大きく成長した18期生

18期学年主任
鳥羽 弘美

午前7時、土砂降りの雨の中重たい荷物を抱えて生徒たちが集合する。あいにくの雨で心配したけれど、遅刻はほとんどなし。良いスタートを切った。18期生の修学旅行は、私自身がこれまで経験したことのない本当に気持ちの良い修学旅行だった。

入学当時、この学年は金髪・茶髪が非常に目立ち、大変な学年にあたってしまったものだと思いながら出発した。「一人一人が気持ちよく学校生活を送れるように」ということで、なにより、授業を大切にすること、を基本に、まず教室への入室が遅れないよう学年団として取り組んできた。頭髪についても、生徒たちにとってはかなり厳しく指導してきた。そういう中で、18期生は少しずつ落ちつきを見せてきたと思う。

修学旅行で心配していたのは、スキー講習の見学者が何人出るかということと雪上運動会で盛り上がってくれるかということだった。

天候に恵まれたということもあったが、見学を予定していた生徒も含め、初日の講習には生徒全員が参加。その後も見学予定の2人以上誰も見学者が出なかった。最後の講習の前は、さすがに疲れ切った顔をしていた生徒

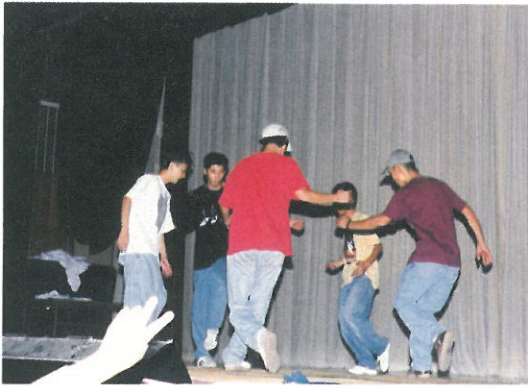
もいて、「もうだめかな」と思っていたが、「みんながんばっている。私だけここで脱落できない」という気持ちが全体に広がっていたように思う。18期生全体として成長してきたのを感じた。

学年全体のレクレーションとして予定していた雪上運動会もレク委員を中心に運営し、大成功だった。

この修学旅行での自信が、3年体育祭での応援・マスゲーム・ダンスの成功につながったと思う。

18期生にはいろいろ厳しく指導してきたけれど、それを糧にしてこれから社会の中でがんばって欲しい。

私にとって本当に良い思い出を残してくれた生徒たちだった。



「努力すること」

18期生
小嶋 恭子

高校生になって、もう2年半近くになろうとしている。この高校生活の中でたくさん得たものがある。人によって得たものは様々だと思うが、私が出たたくさんのものの中で特に良かったと思うことは、お互いに理解し合える友達ができたことだ。

悩んでいれば解決する方法を一緒に考え、うれしい時には共に喜びあいと、互いに刺激しつつ高校生活を送ってきた。こういう友達がいたからこそ、勉強にクラブにと、様々な壁を乗り越えてこれたのだと思う。

私だけでなく柏原東に入った人はそれぞれ友達にめぐまれていることだろう。そんな人たちがたくさんいるからこそ、体育祭などの行事も協力しあえがなされる。

それからもう一つ、私たち生徒一人一人の事を考え助言してくれたり、影から支えてくれる先生方…。

先生方のおかげで『努力すること』を覚えた。

こんな恵まれた環境で高校生活を送れることに満足している。

柏原東に入って本当に良かったと思う。



卒業を間近にして

18期生
宮本 貴

僕がこの柏原東高校へ入学し、早くも2年の年が経ち、その間さまざまな行事がありました。

クラブ活動、遠足、体育祭、文化祭などの行事の中で最も印象深いのは、修学旅行です。楽しく、とても良い思い出となりました。

修学旅行という団体行動や時間厳守の生活の中で、僕たちは積極的に行動し予定の時間より早く、スキー講習を受けることができ、すべての予定していたプログラムを無事成功させることができたと思います。

また、僕たち3年にとって最後の体育祭も良い思い出で、3年男子のマスゲーム、女子のダンス共に大成功だった。

僕は、マスゲームの太鼓をやっていたが、初めは「僕がこんな大役をやっているのだろうか」と思っていたが、友達から「がんばれよ」と励まされ、とても勇気づけられた。いざ本番になると緊張したが、始まると太鼓しか見えなくて一瞬のうちに終わってしまったような気がした。

体育祭も終わり、あと残されているのは進路決定・文化祭・卒業式。残りの高校生活を一日も無駄に過ごすことのないよう、また自分の決めた進路へ近づけるようにがんばっていかうと思った。

19期 在校生は今



Memories



一步前進

19期学年主任
鈴木 太一

19期生も高校生活の半ばを過ぎ、これからの高校生活をどう充実させるのかが大きな課題です。自分で言うのも何ですがこの19期生は今までの柏原東高校から、新たな一步を踏み出した学年ではないかと思っています。

中退生の減少、学習に対する頑張り、自主活動などへの積極的な取り組み、どれを見ても今まで非常に困難だった部分での成果が徐々に表れてきているように思います。しかしあくまでも「一步を踏み出した。」という段階であって全面的にこれらのことが進んでいるのかと言えば「そんなことはない。」というのが現状です。

遅刻や欠席に見られるような基本的な生活習慣に問題のある生徒、アルバイトなどに生活時間の大半をさいてしまいクラブ活動やクラス活動に参加しない生徒など残りの高校生活をがたがたにしてしまいかねない要因がいくつかあるのも事実です。

これらの問題も彼ら自身が将来への展望を強く持てないことに起因しているようです。「こんなことしても意味がない。」「時間の無駄。」といった声を聞くことがあります。しかし彼らには、若者らしく色々なことに興味を持ち、積極的に関わって行動したいという内なる要求

があります。私達教職員の仕事は、この要求を引き出し、彼らに達成感を持たせることではないでしょうか。

残り約1年の私達の取り組みを彼らが素直に受けとめてくれるようないい環境を学校に作り、彼らが卒業するときに、「柏原東高校に来て良かった。」と心から感じてくれることを願いつつ私達教職員も彼らと共に頑張りたいと思います。





今が楽しい、柏原東

19期生
田澤 陵

僕が柏原東に来る前、柏原東のいろんな事を耳にした。柏原東の悪いところやいいところ、不思議といろんな所からウツサを耳にした。僕は、そんな柏原東に興味を持ち、柏原東を受け、そして受かった。

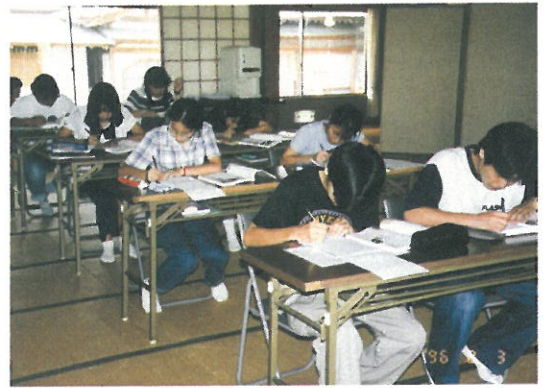
いろんな学校からいろんな奴が来ていて、みんな緊張していた。もちろん僕もそうだった。でもすぐにクラスにもなじんで、友達もできた。皆おもしろい奴ばかりで、学校が楽しかった。はつきり言って学校を休むのがいやだった。

中学の時は、卒業したくないと思うくらい毎日楽しかった。今は、それとは比べものにならないくらい、今が楽しい。いろんな楽しい仲間ができた。

まだ1年と少ししか学校に通っていないけどほとんどの子が友達だ。先輩とも仲良くなれたし、僕が想像していた以上に柏原東は、最高の学校だった。これからもこの柏原東をもっといい学校にしていくために19期生は頑張ってくれると思う。少なくとも僕は、そう思っている。これからもすばらしい仲間達と学校生活を楽しみたいと思う。



20期 在校生は今



Memories



我ら今、ここに生きる

20期学年主任
谷口 政己

本校に赴任して2年目に17期生を担当したことは、私にとって非常に幸せでした。生徒はいろいろ問題を起こしてくれましたが、憎めない生徒ばかりであり、学年も中瀬先生を初め、少し自己中ではありましたが、何よりも明るく前向きな先生ばかりで、楽しく充実した3年間を過ごすことができました。

中でも忘れられないのが進学指導です。1年1組は、17期で最も教科担当の先生に嫌がられたクラスでした。文化祭の展示「割り箸の法隆寺」のように、クラスは6つの建物に分裂し、それを何とか担当が回廊でつないでいました。そんな雰囲気の中でいざ知らずながらも勉強に取り組んでいる生徒がいたのです。「あの生徒を潰してしまうような学校は学校ではない」と思った私は、2年の春、学年主任に「勉強合宿」を持ちかけました。思いがけず学年全員一致で実現した歴史的な勉強合宿は1994年8月1日から2泊3日、信貴山玉蔵院で生徒19名の参加で行われたのです。自学自習を基本に20時間の勉強をやり遂げた生徒たちに、自信と学校への信頼と強い仲間意識がうまれました。そして、翌年3月23日から2泊3日、信貴山成福院で集中講義を中心とした2度目の勉強

合宿が一回り大きく行われました。生徒たちは、苦しいはずの受験勉強も、仲間意識の中で楽しくやり遂げました。合格発表がある度に、生徒も教師も手をたたいて喜び合い、職員室の黒板に合格の文字が踊りました。何と、国立を含む10名の大学合格、女子の短期大学全員合格といった成果をおさめることができたのです。

今、20期生の学年主任として、17期で学んだことを最大限生かし、成果を継承したいと思っています。学年通信「花の20期」では生徒にいろいろな要求を突きつけています。生徒に要求する以上に学年団もフル回転しています。生徒たちが3年後には自分の進路をしっかりとつかみ、すばらしい思い出とともに巣立つて行けるよう、20期学年団は、生徒たちと一緒に充実した今日を生きて行きたいと思います。



花の20期

20期生
松村 有紀

私達の学年通信は「花の20期」という題です。体操服にも20の文字。何もかも20の文字が付いています。20年目という歴史を背中に負いながら、私達はここで3年間過ごしていくのでしょうか。ある先生が、「重荷に考えなくてもいいんじゃないか。期待しているけど、自分の好きなようにしたらいいんだよ。」って言われたけど、その好きな事が分からなくて、それで重荷に感じているんだと思います。早くやりたい事を見つけて、20期生にかやれない事をしたいです。

それから、周りの人に柏原東のことを知ってほしいです。まだまだいい風に見られていないんじゃないかと思うからです。そのためには、体育祭や文化祭で、地域の人や、近くの高校とも、コミュニケーションがとれるようにしたいです。

今年から6月に行われるようになった体育祭で、私はすごいなと思いました。3年の先輩方がすごく仲が良くて、最後まで盛り上がっていたからです。2年後私達もこんな風になれたらなと思います。これが今の私達の目標です。



教務部

「カリキュラム雑感」

私が、この学校に赴任したのは9期生が2年の時で、今からちょうど10年前になります。確かその年の秋に10周年の記念式典が本校の体育館で元近鉄の鈴木啓示投手を迎えて開かれ、その後柏原市立第二体育館で祝賀会が開かれたのを覚えています。何も分からず無我夢中のさなかの出来事で当事者意識が薄かったような気がしています。それが、今20周年の記念誌の原稿を書いていると思うと感慨もひとしおです。さて、本校のカリキュラムは府立普通高校の平均的なもので特記すべきものは特になかったように思います。1年生で各教科必修科目を設定し、2年生で発展的な科目展開をし、3年生ではA1、A2、Bの3コースに分けてそれぞれの進路に対応させてコース選択をさせていました。A1は就職、A2は進学文系、Bは進学理系という分け方でした。私が赴任する前は3年生のA1で2単位の1科目選択（略して一選）があったそうですが様々な問題が生じ、廃止したとのことでした。私は教科の関係上進学理系のクラスに教えに行っていたのですが、殆どの生徒が専門学校を希望しており入試で必要がないということで授業経営で苦心したことを覚えています。つまり、A1、A2、Bというコース分けが必ずしも生徒の実情に合致していないという印象を受けました。しばらくして、昭和64年度に進路指導部よりとにかく生徒の基礎学力をつけなければ話にならないという動議がおこり、これがもとで本校に基礎学力委員会が発足し、平成元年度より全学年一斉に朝のSHRを利用し英、数、国、の基礎事項の小テストをするようになりました。

続いて平成2年度に生徒急減期に伴う種々の問題に対応するため急減期対策委員会より「柏原東リフレッシュプラン検討委員会（仮称）」の設置についての提案がなされ可決されました。これを受けて、委員会では全職員を対象に魅力ある学校づくりを目指すと共に平成6年度より導入される新指導要領に沿ったカリキュラムをどう作成するかというテーマで論文を書くよう課題を課しました。その結果その年度に「明日の柏原東を考える」という冊子が出来上がりました。また、平成2年10月にはLANシステムが完成し、魅力あるカリキュラムの一環として情報処理教育が平成3年の3年生Bコースに初めて導入されました。以後平成6年度からのカリキュラムについて慎重に検討されてきた結果、2年生で情報処理を含む二科目4単位の選択を導入し、3年生では文I、文II、理I、理IIの類型を設定し、午前共通履修、午後類型別選択、クラスは自然学級というかねてより考えられていた形態が一部導入されました。さらに、平成8年度から情報処理コース（府教委では商業コース）を設定することで空き教室にワープロ専用機（カラー書院）41台が平成7年度に設置されました。こうして本校は様々な試行を重ねながら生徒のニーズ及び社会のニーズに如何に応えるかを考え、実践してきたものであります。おわりに、平成7年度大学入試に於いて中学内申5の生徒が国立大学に合格した事実を考えると、さらに組織的、系統的な進学教育がこれからの課題であり、しかも急ぐ課題であるとの認識に今は立つものであります。

